

第3回旧広島陸軍被服支廠の活用の方向性に係る懇談会 議事録

日時 令和4年3月22日(火) 10時00分～

場所 広島県立体育館 中会議室

1 開会

事務局より開会挨拶, 委員紹介

2 議題

(1) 懇談会委員による活用アイデア等の提供【公開】

① 世界の都市での様々な遺産活用事例

安部良アトリエ一級建築士事務所 主宰 安部 良

② 無言の被爆者, 声なき証言者 旧被服支廠赤レンガ倉庫

旧被服支廠の保全を願う懇談会代表 中西 巖

③ 被服支廠について私の思い

広島県原爆被害者団体協議会理事長 箕牧 智之

《質疑応答》

田中委員 ニューヨークの High Line は、電車の軌道敷だけでなく周りを大切にすることがあるというお話を聞いた。今回の被服支廠も広島の中の被服支廠であり同じだと感じた。箕牧さんもアクセスの重要性を言っていたが、「歩く」ということが大事だと安部委員がおっしゃったのが印象的。High Line は 2009 年から工期を分けて開発されたと言われているが、いつごろから再生を考えはじめたのか教えてほしい。

安部委員 観光客として見に行ったので詳しくはわからないが、廃線となって放置された高架を活用しては? という市民の提案から始まったと聞いている。私は 2011 年の第 2 工期が完成した後に訪れ、公園の周りに新築された著名建築家たちによるプロジェクト、これから工事が始まる告知など、周辺の地域が活性化している様子を目の当たりにした。当時はまだ、周辺住民のアクティビティはそれほど確認できなかったが、現在ホームページを見ると、市民参加のプログラムが沢山進んでいる。3 期に分けたことで、市民の意見を取り入れる余地があったのではないかと予想する。段階的に経済効果を生みながら、観光地域となり、最終的には市民の生活として広がったと思う。このプロジェクト以外にも、ヨーロッパやアメリカから始まった市民参加型のまちづくりが、日本にも広がっている事例が見られると思う。そうした中で、ウォークブルシティとか、グリーンインフラストラクチャーといった考え方が一般化してきていると思う。ニューヨークの High Line は、そういった引き金となったプロジェクトの一つだと認識している。

田中委員 グリーンインフラ、まちなかの被服支廠、比治山というモニュメントがあり、まちの記憶をどのように継承していくかが重要である。被爆の証言者が語りつないでいることを、市民を含めてどのように引き継いでいくことができるかが重要である。

安部委員の八丁堀 SORALA の事例について 1 年の実証実験など余裕をもって活用に取り

り組んでいたというお話だった。被服支廠のワークショップでも若い人を含めて熱心に話をしている。これを未来に繋げていくという発想をまだ誰も持っていないかもしれない。そこで被爆された方の証言の確からしさをいかにつないでいくかという部分は重要なものであると感じている。生態系だけでなく、人と人の循環性もグリーンインフラとして重要だと思う。

安部委員 コミュニティを醸成する場面としてもグリーンインフラは有効であると思う。
岡田会長 私も High Line は、非常に注目している。市民目線で発見したという所に価値がある。
平尾委員 安部委員がおっしゃった市民を参加させていくこと、プロセスを共有することが非常に印象的であった。完成しない、余白を残し続けることで自分たちの建物という意識を育てていくことが大事だと思った。八丁堀 SORALA の事例について住民の人がかかっているインセンティブはどうであったのか。中西委員の被服支廠は無言の被爆者という言葉は非常に強い言葉で、資料館ではなく被爆の現場で被爆者の方々から話を聞くということでリアルさが増す。

安部委員 八丁堀の仕事を依頼された時に、マネジメントチームを社内で作ってほしいと提案した。専門部署を作るのは難しいと言われたが、興味を持ってくれた社員たちと一緒にチームを作ってワークをはじめた。まちづくり活動を先駆的に取り組まれていた市民団体やその他の活動団体にも声をかけて、一緒に活動することでお互いに学ぶ、色々な団体をマッチングして新しい企画を作るという方法ができた。誰かにまる投げして依頼するのではなく、プロセスを共有しながら色々なチームを作っていった。その中で、社員たちが青空委員会というボランティアチームを立ち上げた。現在もメンバーを入れ替えながら県内外の団体と一緒に催しを続けている。私の方からは若い世代の創造力の発信、育成の場面に力を入れてほしいと要望しており、コロナ禍で制約のある状況でも活動を継続的している。チームのメンバーも育ちながら周辺の人と一緒に育っていくという仕組みとなっている。

佐渡委員 経営プロセスとして取り組むことは、面白いと感じた。今、考えるベストがあって、将来の人たちがベストを探すということが重要だと思う。もう1つ、平和をどう入れていくかという部分、加害の歴史の伝え方が重要だと前回も出たが、沖縄戦との連携も被服支廠とつながりを感じる。全国の人がかかわった戦争ということを感じられるしくみを取り込めるとよい。広島の人たちにとっての戦争だけでなく、全国、世界の人とつながる場として被服支廠を育てていけるのではないかと感じた。

中西委員への質問として、具体的な提案をいただいたが、特に1号館を保存し、被爆時の雰囲気を保つものにしたかった理由を教えてください。

中西委員 沢山の方が、なだれ込んで亡くなった建物は1号棟である。そのため、1号棟は、厳しい展示・雰囲気にしていただきたい。厳しく重いテーマのものと、明るくて前向きで、ある意味では楽しい部分もある活用を検討いただければと思う。どの棟がどの活用ということはないが、私はできれば、1号棟は、伝承の建物にしてほしいと思う。亡くなった方の代弁をすれば、そういうことになると思う。

安部委員 私も地域の遺産、建物の保存や利活用の提案をしているが、映像や資料があるから、と

いうことで取り壊されていく建物もある。私としては、建物は記憶の器であり、建物があることで伝えられること、資料や映像では伝わらないものがあるのではないかと考えている。

中西委員、箕牧委員は被爆者としての語り部をされているが、現場で証言をするのと、オンラインや違う場所で語り部をするのと、伝わり方など異なることはあるのか教えてほしい。

箕牧委員 私は、建物のそばで話すことが一番よいと感じている。北海道の帯広の高校生にオンラインで証言した後に、実際の場所、平和公園を見たいということで、広島まで来てくれた。

御幸橋の写真の女学生も、みんな 85~90 歳になっている。このような方の声を上げる必要があると思っている。私の近所に夫婦で被服支廠に勤めていた方がいた。その方ももう亡くなった。被服支廠は、旧日本軍の大企業だったのではないと思う。

中西委員 現場で話すのとオンラインなどで話をするとは全く違う。資料館の中で話をするが、話をする方も受け取る人も感覚が違うという。被服支廠内で話すのは怖いし、マイナス面もあるが、戦争の雰囲気、厳しさ、ここで起こった悲劇が感じられるというところで純真な生徒ほど、受け止め方が違うと何度も経験している。オンラインの証言も、こういう時代だからやむを得ない。大いに利用されていいと思うが、私は、被服支廠の中で、話をしたいと思っている。

岡田会長 被服支廠の存在、リアリティが重要ということ。

前野委員 中西委員の話された第 1 号棟の大きな空間をなるべく活かしてという活用の方向性は、私も共感した。糧秣支廠も、被爆時には救護などが行われたと聞く。広島城の中に防空作戦室という施設がある。ここは、比治山高等女学校の生徒が、被爆の第一報を行ったところで有名な場所である。今は中に入れませんが、中に入って話を聞くことで捉え方が違うので、ぜひそうして欲しいという要望をお聞きしている。場の空気が大事で、被服支廠は物を入れなくて空想する余地を残して、お話をすることで、自分の経験として理解できるのではないかと強く感じた。

私は、被爆が何故悲惨なのかというのは、それ以前の生活があったからではと思っている。被爆以前の生活について伝えるため被服支廠をどのように活用していったらいいか中西委員、箕牧委員からの要望をお聞きしたい。

箕牧委員 被服支廠の中を見学する子どもには、まんが（はだしのゲン）を通して知っていただくのがよいと思う。まんがを通して、平和の大切さを感じることがある。私は、昭和 17 年に東京で生まれた。東京大空襲を機に、昭和 20 年 5 月に広島へ疎開してきた。そのため、広島の前被爆の記憶はない。

中西委員 凡そ 100 年経っており、色んな歴史がある。被服支廠の中では、仕事は厳しかったようだが、色々な楽しみもあった時代でもあった。色々な品物を作る作業をしていた。証言書の中にも記載している。色々な種類の仕事があったというのは、非常に貴重な記録だと思う。作業、仕事をして、軍に入られてという体験をされた四国五郎さんの証言や絵を展示してほしいと思う。また、兵器支廠など広島三廠についての記録も知ってもら

いたい。

言い忘れたが、被服支廠にはトイレがないのでぜひトイレを作ってほしい。

岡田会長 戦前、戦中、戦後での役割や歴史の展示が大事だと仰っていただいた。被爆だけでなく、戦前、戦後も重要な歴史の1つだということを我々も確認しておいた方がいいと思った。

利活用の仕方、オランダのアムステルダム造船所跡地でのアート活動について、安部委員にお聞きしたい。

安部委員 アーティストも週末などのプログラムには関わっていると思うが、プロジェクト自体はコンペで一般公募されたもので、建築家のチームが中心となって、研究者のラボとして活用する案となっており、アーティストに限定したものではなく、研究チームが主体で、太陽熱の研究をしているチーム、土壌の研究をしているチーム、食を中心としているチームなど様々な専門の研究フィールドとなっている。

岡田会長 こういう場を活性化する時の芸術家の役割がある。アムステルダムも最初は、造船所跡地の廃墟だった所をアムステルダムの中心地では飽き足らない芸術家の卵たちが移り住んできて、色んなことを始めた。被服支廠で、芸術家たちがどういう役割を果たすかは、今後の議論の内容になると思うが、場の潜在的な魅力とか、ポテンシャルとか、発信できるメッセージの高さを炙り出すきっかけとして、芸術作品が大きな役割を果たすということを証明した事例であると思う。

安部委員 アーティスト達が、場所の持っている歴史や背景などから、作品としてポテンシャルを引き出す様子は、多くの展覧会ですでに実証されていると思う。

積山委員 近年は現代アート、平面の作品ではなく空間造形というジャンルが主流である。映像など複合的な手法でコンセプトを表現することがアートでは問われる。そこに滞在して絵を書くというのは、ひと昔前のイメージで、今は社会に対して何ができるのか、アートでどういう気持ちを表現できるのかが問われる。今はデザイン系、デジタル系、映像を流したり、光を当てたり、ダンスしたり複合的な表現方法が主流である。ドイツ、フランスは、現代アートが主流である。

岡田会長 安部委員の提案には、ヒントが埋まっていたと思う。

(2) 意見交換【非公開】

① 活用に向けた基本的な考え方・アイデアについて

各委員からの主な意見は次のとおり

- ・人と人、世界と広島を「つなぐ」場としての考え方が重要ではないか。
- ・被服支廠を広島の誇りや愛着のある場とするため、被服支廠の価値の発信（認知度向上）が重要ではないか。
- ・広島歴史や風土を基に、新たな芸術や文化などの発信に結び付けていくという考え方が重要ではないか。
- ・県民や市民が自分たちの被服支廠として、自らが活用を考えて創り出していくという考え方が重要ではないか。

- ・被服支廠という場で、戦前、被爆、戦後という歴史を大切にしつつ、広島の未来に繋がる場として活用することを考えるべきではないか。
- ・世界の中での被服支廠、広島の中での被服支廠、地域の中での被服支廠などの多様な視点により、活用を考えていく必要があるのではないか。

以上